

## 2021年「国際ジェンダー学会研究活動奨励賞」研究活動報告書

1. 提出日：2022年5月30日

2. 提出者氏名：小野道子

3. 申請した研究テーマ：

女の子の安全保障に関する考察：パキスタンの「ベンガリー」ディアスポラの娘と母にとっての「路上」

### 4. 研究活動報告

調査研究活動支援金は、博士論文の最終版作成とその後の研究活動の継続のために使わせていただいた。国際ジェンダー学会研究活動奨励賞に応募した時期は、パキスタンのシンド州都カラチ市の「路上」で物売りや物乞いを行う「ベンガリー」（バングラデシュ出身のベンガル人およびミャンマー・アラカン地方出身のバルミー／ロヒンギャ、主に無国籍状態にある人々）の女の子たちと、彼女たちに同行する母親たちが「路上」に出てくることを余儀なくされる理由について、「人間の安全保障」の視点から考察する博士論文を執筆中であった。日本学術振興会特別研究員（DC2）の任期が終了し、研究費も途絶え、非常勤講師や研修講師などの収入しかなかったため、書籍を購入するための研究資金も十分でなかったところ、国際ジェンダー学会の奨励賞をいただくことができて、大変ありがたかった。

2021年度前半に、博士論文を提出し、博士号を取得することができた。博士論文では、カラチのD地区の「路上」を事例に、「ベンガリー」の女の子や母親たちが貧困や生活困窮という理由によるのみ「路上」に出てくるのではなく、「路上」に自らの居場所＝「安全共同体」を作り出している側面があることを描き出した。D地区のマーケットの一角は、外部者からすれば「路上」と呼ぶべき場所であるものの、当事者たちには「路上」という認識はなく、固有名詞で呼ばれる集いの場である。女の子が外で遊んだり女性が外出することが容易ではない社会において、IDカードもない無国籍状態として暮らす彼女たちにとっては、家や地域は必ずしも安全・安心な居場所ではない。従来の「人間の安全保障」研究においては、脅威や不安全が着目されることが多かったが、彼女たち自身が安全や安心をどのように捉えているのか、インタビュー調査を実施し、人間の安全保障が国家によって作られるものではなく、人々が自ら作り出すものであることを明らかにした。

博士論文提出後は、東京大学大学院総合文化研究科学術研究員として、博士論文の出版に向けて刊行助成金に応募するために論文の改訂作業を行った。改訂原稿を作成するための補足調査を実施するために、調査研究活動支援金を用いて、パキスタンのカラチ市で調査を行う予定であったが、渡航を予定していた時期に日本および現地でのコロナ感染症が拡大し、現地の学校も休校になるなど渡航が難しい状況になってしまったため、海外調査を断念した。

いただいた調査研究活動支援金は、現地調査の実施費用の代わりに、書籍購入、博士論文の改訂原稿を作成するにあたってコメントを依頼するための原稿や論文資料の複写費用、大学図書館で研究を行うための旅費、学会費用に充てさせていただいた。研究期間における主な成果物としては、①「パキスタンの「ベンガリー」の子どもたちと教育—ノンフォーマル小学校での学び」（書籍『教育から見る南アジア社会-交錯する機会と苦悩-』2022年4月 玉川大学出版部 第1部第3章）、②「無国籍の子どもの

教育～カラーチーのロヒンギャの子どもたち～」（東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構南アジア研究センター＜映像でみる南アジアの教育—教育熱の高まりと社会変化(全4本)＞に収録、HPに掲載 <http://www.tindas.c.u-tokyo.ac.jp/outcome.html>) の他、日本バングラデシュ協会メールマガジン99号（2022年4月発行）に「イスラマバードに住むチャクマ王国のプリンセス—Rajkumari Troya Triveni Roy さんの語り—」を寄稿した。

調査研究活動支援金をいただいたことで、研究費用についての心配が減ったことはもちろん、外部支援金を得たことは精神的に大きなサポートになった。調査研究活動支援金を使わせていただいて提出することができた博士論文やその後の研究については、今後のジェンダー学会での発表や国際ジェンダー学会誌に論文を投稿させていただくことで、成果を公表していきたい。